全日本中学校長会賞

形のないお守り

沖縄県　竹富町立船浦中学校　二学年　山口　奏空

「山口さん。あんたがいてくれてよかったよ。」

母が、お客様からいただく最高のほめ言葉。幼稚園に通っていた頃、私の降園後の遊び場は生命保険会社の休憩室だった。夕方になり、黒いスーツ姿の女性社員が次々と戻ってくる。扉が開く度に私は振り返り、母の姿を探した。休日、母に連れられてお客様の家まで行くこともあった。バッグの中から取り出した書類を広げて難しい説明をしているが、私には何のことかさっぱり理解できなかった。ただ一つわかっていたのは、お客様が書類に印鑑を押すと、形はないけれど商品が売れたということだけだった。それから何年か過ぎた頃、そのお客様は入院して手術を受け、生命保険と同時に加入した医療保険が適用になったそうだ。その時初めて、母の勧めた商品が形になったことを知った。それと同時に、お客様からおほめの言葉をいただき、母は感謝されていた。

生命保険は、スーパーに並んでいるような形のある商品ではない。食料品や衣服などは購入するとすぐに消費したり使用したりするが、生命保険は将来のことを考えて早いうちから準備するものだ。人は将来に待ち受けている人生がどのようになるか、確実ではないが想像はできる。進学、就職、結婚、出産もあれば突然、死亡することもある。この人生の分岐点に立った時、サポートしてくれるのが生命保険だと言える。学資準備のための保険、収入保障保険、終身保険や定期保険など数多くの商品の中から、自分に必要なものを選ぶのは難しいと思う。複雑な生命保険の種類の中から、お客様に必要な保障額を組み合わせてプランニングし、契約後もサポートしていく。それが母の仕事だった。

今、私は四つの生命保険に入っている。私の出生体重は一〇二〇グラムしかなかった。生まれたその日に主治医の先生から、

「今夜が峠です。」

と言われたそうだ。九歳になるまでは、主治医の先生から経過観察が必要と言われていたので生命保険に加入できなかったが、経過観察が終了して二年がたったのでやっと契約することができた。その時、私には母が安心したように見えた。

現在、私が入っているのは終身保険、三大疾病保障保険や医療保険などだ。病気やケガで入院や手術をしたり、重度の病気をわずらうと適用になるものもあるが、大学生になった時に学費が不足したり、結婚して一時金が必要になった

時などに受け取れる生命保険もある。財布や銀行の通帳に入れてあるお金は簡単に使ってしまうが、保険料として保険会社に支払えば〝保障〟という形に変わって守られる。これは、生命保険を契約することで実は、安心を購入しているのだと考えられる。本人や家族に病気や万一、不幸が起きた際に力強く支えてくれるのが生命保険なのだと言える。

「私は、もう怖い病気にはならないような気がします。」

「そうですか。けれど、生命保険は目には見えないお守りですからね。いつか病気と闘うことがあれば強い味方になります。」

契約した方と母の会話だ。小学生だった私には理解することが難しかったが、今ではその意味が理解できる。形はないけれど、〝保障〟という安心を得ることができる〝お守り〟。その〝お守り〟が将来、〝強い味方〟として形を成すこともあるということだ。もし、父親が小さな子供を残して他界してしまったら、母親はその後、大変苦労するだろう。しかし、生命保険という〝お守り〟を持っていたなら、たちまち〝強い味方〟に変化する。

人は誰でも、生命保険は必要な保障だと感じていると思う。しかし、形のある生活必需品などを揃える方が先になり、そして生命保険は考える時間や難しさもあり、後回しになりがちだ。だが、当たり前と思っている日常はいつ崩れ去るかわからない。形のない〝お守り〟を〝強い味方〟につけ、毎日を安心して活動できるようになることこそが、生命保険の最大の活用法なのだ。